

キリストにあるならば

「コリント人への第二の手紙」5章16節から19節までを朗読。

17節「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」。

今日は主イエス・キリストのご復活を記念する礼拝であります。イエス様のご復活を記念する時は毎年巡ってまいります。ただ過去の出来事、イベントとして「こういうことがあったそうさ」と、繰り返し学ぶということも無駄ではないと思いますが、それはあくまでも過去のことであって、一つの出来事でしかありません。イエス様が十字架におかかりになされたことも過去のことであります。しかし、その過去であるイエス様の十字架を二千数十年後の今、私たちが「それをどのように自分のものとしているか？」ということ、これが大切なことです。神様は、私たちの具体的な生活、日々の歩みの中で新しいいのちに生きる恵みを与えようとしておられます。だから、十字架の出来事を聞いて、「イエス様はお気の毒なことであった。罪人でないのに罪人とされ、あの厳しい痛みと苦しみに耐え、息絶えてくださった。こういう奇特な人は世にはざらにはいない」と。「だから、イエス様は尊敬に値する。立派な人だったな」と言うだけであれば、それでおしまい。いま私たちが日々イエス様を追い求めるのは意味がないこととなります。ましてや十字架にかかられたイエス様は、

墓に葬られ、それで終わるところです。ところが「その墓からよみがえってくださったそうさ。そういう不思議なことが世にあったものだ。死んだ人が生き返るなんて今まで見たこともないし、またイエス様以外にそんな話はなかった。立派なものだな！」と鑑賞するといいますが、眺めているだけでは、私たちにとって何の足しにもならない。まして、イエス様が死ななかつたら、またイエス様がたとえ死んだとしても、生き返らなかつたら、いま私たちがいくら主を求めても、力にもなりません。大切なのはイエス様の三十三年半のご生涯を通して歩まれた主の御心、御思いをいま私たちが自分のものとして具体的な日々の生活の中で、キリストと共に生きること、これこそが何よりも大切なこと、また私たちにとって大いなる救いです。

17節に「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」とあります。私たちはこの世にあって、満足のいく人生を歩んでいるとは思いません。いろいろなことに不足を感じ、不満を抱き、つぶやきながら、また裏切りや不信の気持ち、疑念にさいなまれて、苦しい日々を過ごすことが多々あります。いったいどこに平安があり、安心があり、望みがあり、喜びがあるだろうか、ふと思ってしまう現実であります。この世の生活はまさに四苦八苦、悩みの種ばかりであります。「伝道の書」を読みますと「人は一生、

暗やみと、悲しみと、多くの悩みと、病と、憤りの中にある」(5:17)と語られています。実際の生活は、救いのない、悩みと悲しみと苦しみの中で日々生きているような私たち、何とかここから自分を変えたい、もっと喜びがあり、望みがあり、光り輝く日々を送りたい、誰しもそう思います。そのためにいろいろなことを人は求めます。その結果、世に数えきれないくらいの宗教とか、信仰とか、あるいはそういう「救いだ」と言われるものが、現れては消えていきます。また多くの人々は何とか自分を新しく造り替えたいと思っています。自分の性状性格、あるいは自分の置かれた境遇、「どうしてこういう目に遭わなければならない」「自分はこんなふう生きるために生れて来たわけではないのに……」という痛切な思いがあります。親が悪い、社会が悪い、あるいは兄弟が悪い、あれが悪い、自分だけが日の目を見ない不遇な生涯を強いられていると、自らを悲劇のヒロインにしているのが現実であります。おそらく皆さんもかつてはそういうことを思ったに違いない。「人生不可解、いったい何の良いところがあるだろう」「いつまで生きていけばいいんだ」と。じゃ、死んだらいいかというと、死んだらその先に何かがあるか、これまた訳が分からない。そういう八方塞がりの中であって、私たちは「何とか変わることができないか」と、はかない望みを抱きながら生きています。そういうときに大抵言われるのは、「死んでやり直したらいい」と。「もう一度、自分の人生をリセットして、初めからやり直すことができれば」と、ふとそう思い

ます。だんだん年を取ってきまして、そのような思いを深くします。皆さんもおそらくそうだと思います。若い人を見ると羨ましい。「30年前、40年前の自分に今一度戻れたら、人生やり直すことができれば、今とは随分違っていたに違いない」と思います。いや、違っていたかどうか分からない、結局は同じ道歩んでいるに違いないのですが……。ついついそういう青い鳥を求めて、いろいろな空想にふけてしまいます。しかし、所詮自分の力で自分を変えることができない。どんなに努力してみても……。自分で自分を作ったのではない。自分のものであって、自分は何一つそれを造りだしたわけではない。生まれてから今までいろいろな人々との関わり、あるいは生活を通して成長してくる。学校を出て、社会に出て、結婚し、家庭をもちという、そして、そこで子育てをしたりしながら今の自分がある。「そうなったのはどうしてだろうか？」と訳が分からない。だから、いろいろと過去を振り返ってみると、「あのときどうしてあんなことをしたのだろう」「あそこで選択が間違った」「ここでもうちょっと慎重に選んでおけば、こんな人生ではなかったかもしれない」とまで考える。とって、自分の人生を巻き戻すことはできません。

ところが、いま読みました御言葉に、「**だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である**」とあります。これまで生きてきた人生、あるいは自分の性状性格、私というものの姿かたち、自己イメージというのがあります。

良い所もある、誇らしい所もある、しかし、到底人には見せられないような、こんな醜悪な自分が……と思うところもある。いろいろなものが混ざり合っている。だからといって、それを自分の力で右に左に少しも変えることはできない。そういう行き詰った、生きるに生きられない、死ぬに死ねない、八方塞がりであった私たちに対して、神様はイエス・キリストをこの世に遣わしてくださった。私たちの神様に対しての罪のことごとくを清めて、もう一度新しく造り直すために、イエス様を遣わしてくださった。だから「ヨハネによる福音書」3章にありますように、ニコデモという人、ユダヤ人の指導者がイエス様の所へ来ました。そのときイエス様がおっしゃったのは「**だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない**」(3:5)と言われた。「だれでも新しく生れ替わる？ じゃ、どうすればいい？」、ニコデモ先生は、「もう一度お母さんのおなかに入るのですか？」と。そんなことはできません。イエス様は決してそういうことをおっしゃったのではありません。「**水と霊とから生れなければ…**」と、その「水と霊」というのは、イエス・キリストとその御言葉、そして御言葉に伴う神様からの力によって生きる者と変わる、これが新しく生きることでありとおっしゃった。ニコデモ先生はそのことが具体的にどういうことか分からなかったと思います。しかし、やがてイエス様が三十三年半の地上のご生涯の終わりに、あのゴルゴダの丘で「**わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひし**」(マタイ 27:46 文語訳)と、神様からの呪いを

受け、裁きを受けて、死に絶えてくださった。イエス様のあがない、それは実は私たち一人ひとりのためであったのです。そこに初めて「新しく生れなければ」と言われるイエス様の言葉が具体化していくのです。

生まれるためには死ななければならぬ。まず死が前提であります。死んで、そしてもう一度新しく生まれる。そのイエス様がニコデモ先生におっしゃった「新しく生まれる」ことがどういうことであるかを具体的にご自身が体験していただき、それを私たちにも見せてくださったのが、復活であります。先ほど申し上げたように、いろいろ意味で不平不満、不安と苛立ちと憤りの中で日々を過ごしています。その問題のいちばんの根源は、いま目の前の問題、事柄、人にあるのではなく、私たちの造り主でいらっしゃる神様との関係、神様との間に罪という大きな壁が出来上がってしまった。そして神様からの祝福と恵みといのちと力を受けることができなくなっている。イエス様は、その罪の壁、神様と人との間の壁、中垣を取り除くために、この世に来てくださった。そして、そのことを十字架に具体化してくださった。これは過去の出来事のように思いますが、それを今度は自分の心に当てはめて、「私がいま心に抱いている怒りや憤り、悲しみや悩み、それこそが罪の結果である。その罪のゆえにイエス様が十字架に死んだのである」としっかり自分につなぐ。ただ単に過去の出来事として、「イエス様は十字架にかかって、わたしの罪ととがのた

めに死んでくださったそうだ。有難いこと」と言いつつ、「今の自分の心の中にある罪とその十字架と、どのようにつながっているのか?」。十字架が今の自分につながらなければ、いつまでたっても向こう岸の十字架、こちらの私であって、それらが一体にならない。そのために、まず、自分自身の罪の実相といいますか、姿をしっかりとつかんでおかなければ、そこにつながりません。ある意味で、人が自分に絶望することは幸いなことです。だから、神様は、いろいろな機会に人が誇りと思っていたこと、自分の力を誇った生き方、いくらかでも人よりも優れた者に見せようとする自分の心、そういうものを木端みじんに打ち砕くために、いろいろな事を起こしておられる。試練といわれるもの、艱難といわれるものは、まさにそのことであります。神様はいろいろな事をなさって、私たちにキリストの十字架を打ちこんでくださる。

「へブル人への手紙」12章7節から11節までを朗読。

ここに「訓練」と記されています。様々な悩みに遭い、困難や苦しみに遭う。そのことを通して、私たちが自分を深く探る、自分を知るためです。そういう自分と二千年前、ゴルゴダの丘にご自身の命を捨てて、「父よ、彼らを赦し給へ」(ルカ23:34文語訳)と、ご自身が私たちの代わりになって、呪われてくださった。そのイエス様の御業と私が、一つとなってしまう。イエス様の十字架は、誰のためでもない、実は私のためであったと、いや

私こそがイエス様の救いなくしては滅びである、救いがないことを徹底して悟るのは、様々な試練を通してであります。

だからここ10節の終わりに、「そのきよさにあずからせるために、そうされるのである」とあります。父なる神様は、私たちを全く新しく造り替えること、きよめる為に様々な困難やいろいろなこと、人との軋轢(あつれき)や家庭の問題、職場の問題、様々な問題の中に置かれる。「どうして自分がこんな目に遭わなければならない」と、こう思うとき、「しばし待て」と、もう一度振り返って、「今このことを通して神様は、私に何を求めておられるのか?」「私のどこを、どのように、神様は造り替えよう、清めようとしていらっしゃるのか?」、そのことをよく考えていただきたい。そのとき初めて、十字架と自分が本当に近くなっていく。人を非難し、「あいつが悪い、こいつが悪い」と思っている心をもう一度よくよく探ってみるとき、諸悪の根源は、己(おのれ)、自分だということに行き当たります。

私自身もそういう経験をしました。そのときに初めてイエス様の赦しが、どんなに大きなものであったか、「自分にとってこれ無くしては滅びであったな」と悟ったのです。それから後もそうありますが、一回だけではありません。事あるごとにいろいろな問題や事柄を通して…。社会で生きることは、人ともぶつかるし、事情や境遇、家の中も外でも、いろいろなところで問題に遭います。憎しみが湧いてきたり、怒りが湧いてきたり、

人を裁き、人を呪い、そのような自分の心の様子を、いろいろな事件や事柄を通してしっかり知るのです。

私も、私の両親も家内の両親も見送って、御国に帰りました。しかし、両親が弱ってくる、親を介護する、あるいは、いろいろな世話をするに当たって、それまで感じたことのない、自分の心に様々な思いが錯綜（さくそう）してくる。ただ単に親だから子どもとしての責任としてこれをしてやれば、何とか不自由のないようにしてやろうと、表面的にはそういう気持ちではありますが、しかし、自分の内側は、言葉にもならないぐらいに時には荒れますし、嵐が吹いてきます。人ともぶつかります。また一生懸命にやっても、それに対する相手の反応に、こちらが翻弄（ほんろう）されることを経験します。そのように「どうして私だけがこんな目に遭わなければならない」と思うような中に、神様はあえて置いてくださる。そこを通らなければ現れてこない自分の姿を見せようとしてくださる。ですから、いろいろなことに当たったとき、この問題がああだこうだと、目の前の状況を変えようとするのではなくて、ここで神様は「私のどういうところを取り除いて、どういう新しいものに造り替えようとしていらっしゃるのか?」、真剣にそのことに向き合って、「この事のなかでイエス様の十字架を、どのように受けて行けばいいのだろうか?」と求めるとき、そこで初めてイエス様の十字架、イエス様のあがない、赦しと、自分の罪、その赦しと一つにつながる。そこにつながる

と、パウロがそう言うように、「我キリストと偕（とも）に十字架につけられたり」（ガラテヤ2:20 文語訳）と、わたしは既にイエス様と死んだ者ですと、そこで十字架上のイエス様と一つになります。そして「最早（もはや）われ生くるにあらず」、もう自分は死んでしまう、キリストの死に合わせられるのです。

家庭の中で何か不幸があったり、自分自身が思い掛けない病気を与えられたり、悩みにあったとき、「ここで、この問題の中、この病気の中、この悩みの中で、イエス様の十字架をどこに置いていくのか?」「神様は、ここで私に何を教えようとしてくださるのか?」。キリストに密着して行くことです。そうして行きますと、自ら自分の心と思いが変わります。それまでは相手ばかりを非難していた心に、「そうではない。もっと問題になることが自分の中に有りやしないか?」「確かにあのこともこのことも、本当に自分のほうが……」、そのことを思い巡らして行くと、十字架の主がどれほど大きなご犠牲を払ってくださったか、それに、そうしなければ赦されないほどの自分の罪であることを、そこで徹底して悟らせてくださる。これがキリストと一体となっていく大切な歩みです。一つの問題の中で、相手がいる場合もあるでしょうし、いない場合もあるでしょうが、やり取りする売り言葉に買い言葉、どんどん激しくなって争い事になって行く。そしてけんか別れして、夜も眠られない。悶々と夜中に「何で、あいつがあんなことを言った。ああだろうか、こうだろうか」と、どん

どんと10年前、20年前、過去にまでさかのぼって、「そう言えば、あいつ、あんなだった。あいつや親がいかん、親が！」と、自分の怒りがどこまでも増大する。そういうとき、「イエス様の十字架はどこだったのだろう？」「私にとっての主は、どれほどの大きなご犠牲を払ってくれたのだろうか？」。そうやって、イエス様を受けて立つとき、いままで呪っていた思いが、「気が付かなかった。あの人にはこういうところがある。それに対して自分のほうがかたくなであり、頑固であり、また相手に対して冷たい、冷ややかな心しかない自分であった」と、そこで徹底して己が砕かれます。そうやって十字架の一つとなって行くとき、今度はよみがえったイエス様、「主がわたしの命です」、イエス様が、今度は「あなたはわたしに従ってきなさい」と、イエス様に従う人生へ私たちを造り変えてくださる。新しくされる。まさにこれがイエス様の復活、よみがえったイエス様と共に生きる者となる。「いま主がここに立っていてくださる」と、十字架の死を通して、死んだ主は、わたしのためによみがえってくださった。一週目の初めの日、弟子たちが墓に参りました。そこに納めていたイエス様、ところが、もうそこにはいらっしゃらない。「よみがえられたのだ」と御使いから告げられる。四つの福音書のどれにも、このよみがえりについての記事が語られています。主がよみがえられなかったならば、私たちのいのちがない。私たちが十字架に死んで、そして死んだ者を生かしてくださるイエス・キリストがよみがえって、今もここに共にいてくださる。昔

よみがえって、今はどこかへ旅行に出ているらしいとか、よみがえられたイエス様は、この世ではない、どこか遠くのほうにいらっしゃるらしい。今の私？そこにはイエス様はいらっしゃらない。そうであるなら、何の役にも立ちません。よみがえられたイエス様は、確かに天にお帰りになりましたが、しかし、そこからご自身の霊、神の霊、聖霊を私たちに注いでくださった。今イエス様が、ここに共にいてくださると同じ恵みを、神様は与えてくださる。目には見えないが、イエス様は、確かに今は神の右に座して、私たちのために執り成してくださる。救い主として、大祭司としての役割を果たしてくださる。今、ここにもまたよみがえったイエス様が私と共に、皆さんと共にいてくださる。それはかつて弟子たちと一緒に生きてくださったイエス様、手で触ることのできる、目で見えるイエス様ではなく、目で見ることでもできないけれども、私たちの魂の内に宿ってくださる神の霊、キリストの霊が共にあって、いつでもどんなときにでも、主は慰めとなり、喜びとなり、導き手となって、私たちに生きるいのちを注いでくださる。「生きるいのちとは何か？」肉体の命ではありません。私たちの魂の内に喜び、感謝、望み、平安、力があふれてくる。

ある姉妹は、新興宗教に惑わされて、精神的に障害を受けることになって、長いこと苦しみました。二度も三度も自殺をしかけて、未遂で終わりました。その方が妹さんや周囲の方々に導かれて、教

会に来ました。礼拝が始まって、ご主人と二人で入って来られました。全く命がない人のようでした。顔をまともに上に上げきれなくて、ジーッと下を向いていらっしやる。彼女は礼拝で御言葉を聞きながら、見る見るうちに変わって行く。望みなく、絶望の淵に立っていた姉妹が、イエス様の話を聞きつつ、キリストの霊が注がれてくる。終わって帰るときは、少し元気をもったような顔で帰って行かれました。そして、三ヶ月ぐらいたったとき、見違えるようになりました。九月の終わりに洗礼を受けられました。実に短期間でありましたが、その姉妹の中に新しいいのちが芽生えて、育ったのです。そのいのちは肉体の命ではなく、魂、心の生きる喜びと、望みと平安、安心が与えられるものです。その後、郷里である西宮の方にお帰りになりました。今は、本当にイエス様のいのちで生かされています。喜んで、喜んで輝いている。昔の自分がうそであったように思われる。こんなに楽しく明るく生きることができる、こういう所があったとは、到底夢にも思わなかった。大変喜んでおられました。

「コリント人への第二の手紙」5章17節に「だれでもキリストにあるならば」と、これは短い言葉ですけれども、そこにはキリストの十字架の死と、よみがえりの主と、その中に生きている私たち、パウロが言うように「キリストと共に十字架に死んだわたしは、よみがえってくださったキリストがわたしのうちに生きておられます」。主が喜ばれること、主が願っていること、主が駄目と言われるこ

と、ことごとく主の御心に従う。徹底してよみがえられた主に、「今ここに主と共に生きています」と言える歩みをして行きたい。それが主の復活を祝う恵みだからです。いつでも、どんなときでも、「いま私はキリストと共に生きています」「主がここにおられます」と言えるような生き方。食べるにしても飲むにしても、出るにしても入るにしても、生活の全ての中で「ここに主がおられます」と、絶えずそれを自覚して生きようではありませんか。そうするとき、「キリストが今日よみがえってくださった」と言えるのです。

どうぞ、ただに過去を記念し、振り返って詠嘆するだけでなく、「今、主はどこにおられるか？」「私の内に生きています」「キリストが私の内におられます」と、はっきりと告白して行こうではありませんか。

ご一緒にお祈りをいたしましょう。